

ラッセル



二人ともスノシューで滑るように歩いている。取立山で。カンジキだとうはいかない。

山岳会の会員は季節を問わず一年中山に行くが、雪におおわれた冬の山はその美しさから格別なものがある。

新雪の山に入ると強いられるのがラッセルである。ラッセルはラッセル車から転用された登山用語で、深い雪の中を進むときに先頭が後ろに続く人のためにひたすら道を空けていく作業である。

道を空けると言っても、スコップのような除雪道具を使うのではなく、登山靴にカンジキかスノシューを付けてただ歩くだけである。先頭は誰もまだ歩いていないふわふわの雪の中を行くので、これらの道具を付けていても足は雪の中に深く沈む。体力の消耗は激しい。新雪の斜面では時には雪が腰や胸まで来ることがあるが、そこをも進んでいかなければならない。

一人が長く先頭を続けるとスピードが落ちてくるので、先頭は列の最後尾に廻り二番目が先頭になる。これを繰り返して全員が必ずトップを歩くようにする。一番後ろになつたときの楽なこと！最初から立派な道が出来ていると勘違いするくらいである。

誰かがつくった道をあとから行けば楽なので、それに徹する者が出てくる。ラッセル

泥棒と呼ぶらしいが、確かにいますよと会員の一人から聞いたことがある。われわれが一生懸命道を空けてそして休憩のために停止すると、決まってすぐ下で彼らも休憩するというのである。われわれが発すると彼らも動き出す。決して前に行くことがない。

なんともけちな精神だとは思いますが、山は体力にあわせて登ればいいし、先頭で雪を分けて進んでいくのも冬山のひとつの楽しみなので、ラッセル泥棒に立腹することはない。ラッセルになくてもならない道具がカンジキとスノシューである。登山用のカンジキは猟師が使っていると異なり、三角錐状の爪が二本付いている。斜面を登るときに必要なだからである。

カンジキは「わかん」とも「わっぱ」とも言われる。昔は天然の木材を利用して作られていたが、最近は専らアルミニウム製である。

カンジキは靴だけの足（つぼ足という）と比べれば確かに沈まないが、丸くなっているとところに雪を乗せて持ち上げることになるので、そのときの雪を落とさなければならぬことと、互いに踏まないために股状態で進まなければならないこととで、後ろからその歩く様子を見ると左右の足が外側に輪を描くようにして進んでいくのが分かる。

これを「わっぱダンス」と呼んでいる。

スノシューは五、六年前から日本の山で使われ始めたように思う。これにも立派な爪が付いている。カンジキが丸形であるのに対し、スノシューは楕円形でストックを二本使って漕ぐようにして進む。カンジキより断然沈まない。カンジキと比べればスピードも問題にならないくらい速い。

昨年二月、同じくらい年かさの三人で、一人がカンジキ、あとの二人がスノシューで新雪の山に入ったことがあった。カンジキの一人は体力に絶対の自信があったのに、われわれ二人に遅れること甚だしかった。道具の差であった。

体力を維持し進化していく道具のお世話になり冬山を楽しみたいと思っている。

(二〇〇八年一月十一日)